

教学半也



ご意見はコチラから

令和7年12月8日

No.16

全ての読者対象

初任者研修 教師力向上研修Ⅲ 令和7年10月21日 与える支援から、一緒に考える支援へ

本研修のねらいは、特別な支援が必要な子どもの理解や指導について学び、これまで取り組んできた学級経営や教科指導等について、特別支援教育の視点から振り返ったり、意見交換したりすることを通して、自己課題を解決するための参考とすることです。初任者研修研修コーディネーターも一緒に参観した、諏訪・上伊那・下伊那の初任者の様子を報告します。



【参加者の感想】

グループで話す中で、子どもと一緒に支援について考えることは、自己課題である「主体的に活動する」に通じるところがあると感じました。生徒の主体的な活動にならない理由を、もう一度、背景や要因から探ってみたいです。



対話が深まるグループ活動やペア学習が自己課題です。改めて、机を合わせる活動を位置付けるだけでは、逆に困ってしまう児童がいると気が付きました。対話の流れや行い方を視覚的に示すなど、子ども目線で工夫をしたいです。



前任者から引き継いだ、学習プリントへの漢字のルビ振りを必要な支援と信じて行ってきました。子どもにとってわかりやすい教材づくりが自己課題なので、まずは、児童の実態把握を大切に、ルビ振りの意味を見直したいです。



グループでの意見交換は、困っている子どもに対して「何が（何から）できそうか」をひとりで考えるのではなく、複数の目で実態をとらえ、支援について一緒に考えることの大切さを再確認する機会となりました。参観した初任研コーディネーターの先生も、「初任者の実践や互いの実体験を基に『子ども自身はどう考えているか』など、子ども目線での対話が行われ、自己課題に結び付けて発言している姿に頼もしさを感じた」と、嬉しそうに感想を述べていました。

次回（1月）の初任者研修が1年のまとめとなります。特別支援教育の大切さに触れ、自己課題の解決に向けて歩みを進める初任者の成長が楽しみでなりません。

研修会でも紹介した、特別支援教育の基本や子どもの支援について確認ができる資料の一部を紹介します。二次元コードからダウンロードも可能です。

授業構想ごとに事例を掲載



学習指導要領
サポートブック



子どもの姿で支援を掲載



合理的配慮
実践事例集



新シリーズ『キラリ★Pick Up』始動！

これまでの学校訪問で出会った先生方の工夫やアイデアについて、シリーズで紹介していきます。先生方の日頃の授業改善の参考になれば幸いです。

キラリ★Pick Up

造形的な見方・考え方を働かせるための支援

～美術科の授業より～

美術科の鑑賞授業（海を渡った日本の表現）の導入で、K中学校のT先生は複数の日本の浮世絵と西洋の絵画を掲示し、「これらの絵を見てどう感じますか？」と生徒に尋ねました。

この時、Aさんは、絵を漠然と眺めながら「ゴッホの絵がたくさんある」とつぶやきました。確かに黒板にはゴッホの絵がたくさんありましたが、このようなAさんの姿からは、授業のねらいに迫るために「造形的な見方・考え方」を働かせているとは言えません。

しかし、そんな生徒の姿を捉えたT先生は「じゃあ絵の感じはどう？例えばこの絵は明るい？」と改めて生徒に尋ねました。すると生徒たちは「明度」を視点に絵を見比べ、「明らかに暗い、暗いからこっちの絵が意図的に明るく描いていることが分かる」「あ、こっちの絵は影がない」と次々に感じたことや見付けたことを話すようになりました。冒頭で紹介したAさんも、指差しをしながら2枚の絵を比較し、「大事なところは強調して目立たせている」と、授業のねらいに迫るまともをすることができていました。



【キラリポイント！】

生徒の資質・能力の育成において、各教科等の見方・考え方を働かせることは不可欠です。T先生は、生徒の自由な気付きを待ち受けつつも、そうならない場合を想定し、何に着目して見るのか「造形的な視点（本時では「明度や彩度」「構図」等）」を示し、生徒が鑑賞の視点をもつことができるように発問し直しました。本時のねらいに迫るための教師の発問の大切さを改めて学ぶ場面でした。

事務所だよりへの感想・ご意見をお寄せください。

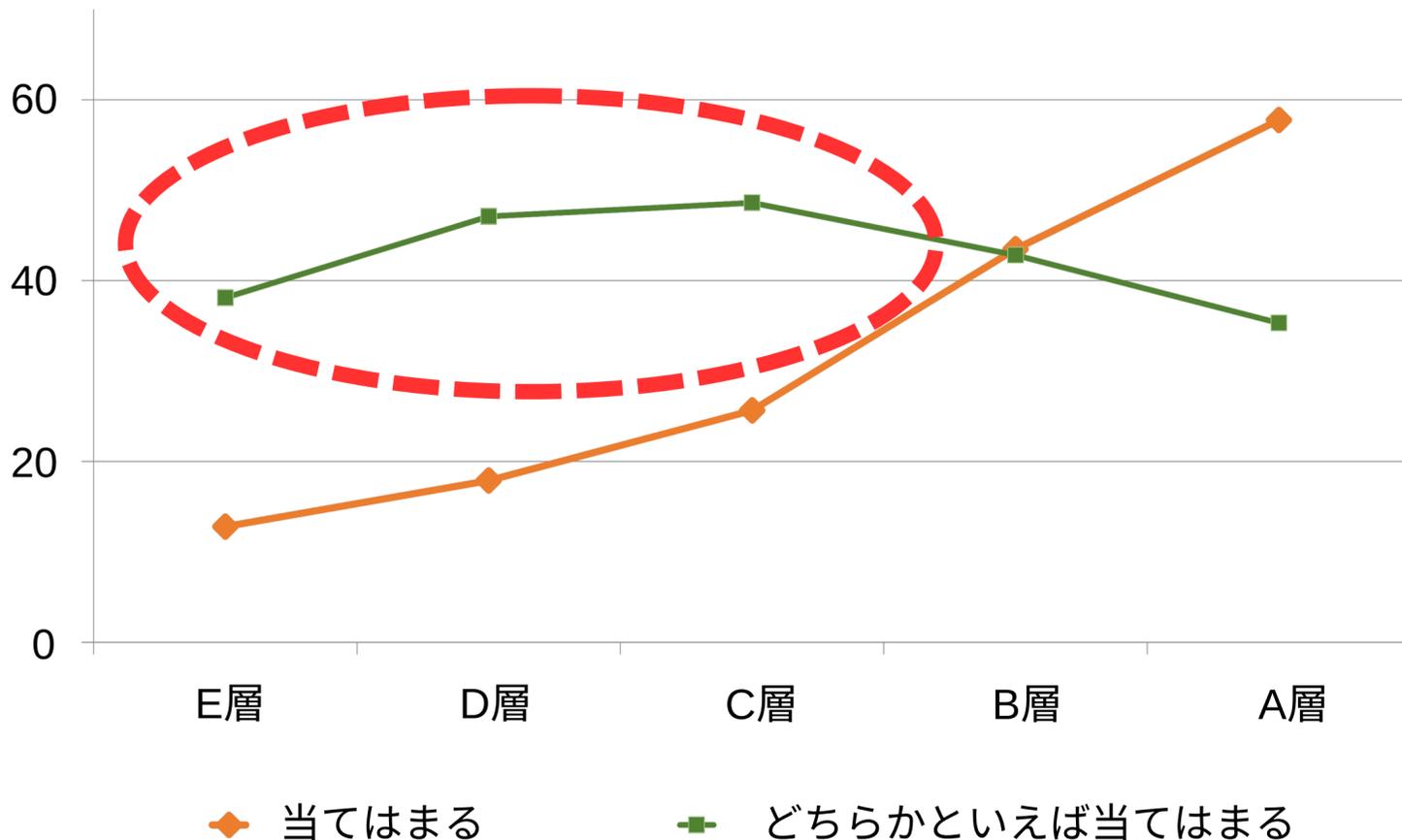
先生方のニーズに応じた情報を届けたいと考えています。下の二次元コードを読み取っていただき、感想やご意見のご入力をお願いします。今後の事務所だよりの参考にさせていただきます。なお、次の号より、南信教育事務所だより表題の右に、この二次元コードを掲載します。いつでもご入力いただけます。ご協力をよろしくお願いいたします。





長野県の子ども「よさ」や「可能性」

「数学の授業の内容はよくわかりますか」の回答状況



グラフの見方
 中学校数学を受けた生徒を、正答数の多い順に並べて、上位から20%ずつ5つのグループに分けたものがA～E層です。グラフは「数学の授業の内容はよくわかりますか」という質問に対する肯定的回答の割合を示しています。
 例えば、正答数の多いA層は「授業の内容はよくわかりますか」の質問に対して、「当てはまる」と回答している生徒が約60%いることが読み取れます。また、正答数が多くなるにつれ、「当てはまる」の回答が増えています。

Q 〇の部分に注目！どんなことが考えられるでしょう？

正答数の多くない、C～E層に「数学の授業の内容はよくわかりますか」の質問に、「どちらかといえば当てはまる」の生徒が、40～50%います。どうしてでしょう？

〇の部分の子供の「よさ」や「可能性」は何でしょう？

- ・「どちらかといえば当てはまる」と回答していることから、授業に一生懸命取り組んでいる？
 - ・「どちらかといえば当てはまる」と回答していることから、基本的な計算はできている？
- でも、もしかしたら、授業のねらいが曖昧になっているから、その子なりの何となくこんなことができたという思いが、「どちらかといえば当てはまる」につながったかもしれない。

「よさ」や「可能性」を伸ばしましょう！

- 一生懸命取り組んでいることを認めることは大事。基礎基本の定着も大事。それ以外にも、
- ・教師も、子どもも授業のねらいが明確になるように、板書に位置づけよう。
 - ・振り返りの場面で、学びを子ども自身で自覚できるようにしよう。振り返りが単なる感想で終わらないように、「何がわかったか」「何ができるようになったか」「どうしてできるようになったか」を視点に、振り返りができるようにしよう。